姿に接し、入院中種々ご厚意をいただいた。

深夜のバラスおろし作業

退院後の二、三か所での作業を終え、帰国するまでは線路の補修と鉄道敷設作業であった。枕木、レールの敷設作業では私は鉄道隊出身なので割合楽な作業といえた。これにはウラがあって、それは深夜の作業が待っていたのである。九時就寝、やっと眠りにはいったと思うころ、全員起床させられ、貨車に積んであるバラスを線路上におろす作業であった。積んであるバラスは凍りついていて、スコップでは歯が立たず、ツルハシで打ち砕いてそれを少しずつおろすのである。作業時間も含めて夜の二、三時間にも及ぶこの辛い作業はシベリヤ抑留中の最も厳しいものであった。夜は徹夜の作業、昼は普通の作業と全く非人間的な労働であった。

ソ連抑留手記

宮崎県　宮井正則

ソ連軍侵入

朝鮮咸鏡北道羅津重砲兵連隊に所属する私たちは、甘吐峰陣地において昭和二十年八月九日突如として大空襲を受ける。

ソ連軍から攻撃を受ける状態が数日続いているうち、関東軍は集結せよとの命により行動展開中、富寧において日本軍は降伏したとの情報が流れた。いや日本は降伏はしない停戦だろうといっているうち、八月二十一日のことである。日本軍はソ連の指揮下にはいるようにとのことで、兵士たちは大混乱状態となった。中には脱走しようとする者もあった。一人で行動すると命の保証はないぞと脱走の制止につとめたが、こうなれば私たちは集団行動が一番安全であると判断して行動することにした。

収容所生活始まる

富寧の仮収容所となったところは発電所関係の施設だった。施設の周囲は有刺鉄線が張りめぐらされ、四つ角に立てられた監視塔には小銃を持ったソ連兵が常に監視している。

食事は朝、昼、夕の三食とも大豆だけの食事で、他に何も仕事をするわけでもなく、ただじいっとしているだけである。

仮収容所生活にはいって二〜三日たってからのことである。真夜中に私たちが寝ている部屋の中にソ連兵が三人くらい忍び込んで来て目を覚まして見ると、手りゅう弾のようなものをふりかざして私のかばんや水筒等をさらっていった。

翌朝通訳を通じてソ連軍の上官に返してもらうよう申し入れをしたが、盗まれた品は返ってこなかった。

仮収容所生活が約一か月くらいして、日本軍兵士はソ連政府から正式に日本へ送還するのでこれからの行動はすべてソ連軍の指示に従うようにとのことであった。やがて十月半ばのころ、ソ連軍の貨物自動車に乗せられ満州国延吉の収容所に移送されることとなった。

延吉収容所は、旧日本軍の兵舎がそのまま残されていたので、施設はまあまあであった。ここでの生活が十日くらいたって十一月三日（昔の明治節の日）二段式になった貨物列車に乗車することになり、行先不明のまま貨車輸送となった。護衛に当たるソ連兵に行き先を尋ねてもニズナイ（知らない）の一点張りだった。

ソ連領に入る

行先不明のまま十一月三日延吉を出発した輸送列車は西へ西へと進む。出発してから四〜五日目に私の原隊であったハイラルを通過する際の心境は例えようがなかった。それから間もなく満州里を通過し、いよいよ列車はソ連領に入った。ソ連領に入ってもどこで下車するものやら全然わからない。

ラーダー収容所に入る

満州の延吉を出発してから丁度一か月目に当たる十二月三日の朝、雪深い小さな駅に着き、全員荷物を持って下車せよとのことである。

駅で下車して徒歩で約十分くらいのところに監視塔が

見えた。ラーダー収容所であった。この収容所にはドイツをはじめハンガリー、オランダ、ベルギー等独ソ戦関係の捕虜収容所となっていたことが入所してわかった。

私たち日本軍がこの収容所に入所するときに私たちを歓迎するかのように日本語で「見よ東海の空開けて旭日高く輝けば……」を歌って私たちの入所を歓迎してもらったのは印象的だった。

白カバの木の林立する中に土のう式でつくられていたのが宿舎に当てられていた。

ここでの生活は炊事の燃料に使うまき取りや、食事用の馬鈴薯の皮むきが日課だった。この収容所での日本軍兵士は千人近くではなかったかと推定している。毎日がこんなふうだったので、いつになったら日本へ帰れるのだろうと、ただその日のくるのが待ち遠しくてならなかった。

エラブカ収容所に移動

収容所生活にもなれたころ突然日本軍は移動することになり、ドイツ兵やハンガリー兵と別れを惜しんだ。移動になったのは七月のある日のこと。来たときと同じような貨車に乗ることになった、全く行き先不明である。中にはこれで日本に帰るのだと言う者もいて半信半疑であった。三日くらいしてちいさな駅に着くと全員下車せよとのことで、ド車後は炎天下の徒歩軍である。夜になって野原に野宿することになった。あいにく夕立が来て雨宿りすることもできず全員びしょぬれとなった。このようなことで睡眠もできず、翌日も早朝から行軍である。やがてエラブカの町に着いたのは夕刻だった。

エラブカ収容所では日本軍だけの収容所であった。ここに移されたからには今年中には帰ることはないと皆あきらめざるを得なかった。

ここでは自活が目的で約十キロくらい離れたところの伐採地（ボルショイボール）から収容所までの間をそりでまき運搬である。まき運搬は毎日続けられていたので交代作業であった。またたまには農場に出てバレイショづくりの農作業にも出かける日もあった。作業で一番つらかったのは冬季の伐採作業であった。雪中の作業は大変だったが、お互いが暖をとり厳しい冬を乗り越えるには我慢しなければならなかった。

カザン収容所に移動

エラブカ収容所も二年目の春となり雪解けとなったが、帰還の情報は全くない。ダモイ（帰還）が待ち遠しい、そのような心境の毎日であった。折りしも建設作業への協力要請があったのでそれに参加することにした。昭和二十二年八月のことである。エラブカからボルガ河を船で下り、一昼夜してカザンに着く。宿舎は立派であった。ここでの作業は発電所建設作業のため土工作業や資材運搬等である。

この収容所は工場と接近していたので、スチームを利用して日本式浴槽で二年ぶりに体をいやすことができた。また内地の自宅へ往復はがきを出すようにとのことで、ただ元気でいるから安心してほしいとだけ書くことが許された。所在地は書くことはできなかった。やがて三か月くらいして父からの返信が来たときのうれしさは忘れることができない。このうれしさと裏腹にこの年も厳しい冬を迎える。今年も帰ることはできない。外では雪が容赦なく降り続いている。零下二十度。

ダモイ（帰還）

昭和二十三年六月のある日、重要な話があるから全員集合せよとのことである。またどこかに連れていかれるのかと半信半疑のうちに貨車に乗ることになった。やがて列車は東の方向へ進む。だれとなくダモイ（帰還）ダモイだと一日々々が楽しくなってきた。カザンを出発して約二十日くらいしてナホトカに着いた、ナホトカに着いた私たちは検査も順調に進み、三日目には帰還船の英彦丸に乗船することができた。乗船するまでソ連側の話では日本からでむかえの船がこないから早く帰れないのだと聞いていたが、乗船してから船員の話では、あなたたちの帰還を待っているけれども配船の連絡がないからとのことで、実にふんまんに耐えられなかった。乗船後二日目の朝、舞鶴港入港の感激は忘れることはできない。舞鶴上陸二十三年七月三日。英彦丸。